

魅せる医療／見せる医療

湯浅 誠（反貧困ネットワーク事務局長）

ご多分に漏れず、私も人には医療を勧めるが、自分ではなかなか病院に行かない一人だ。診察を受けて原因を特定してもらい、必要な薬を処方してもらったほうが完治が早いと頭では理解しつつ、白衣の人たちやら医療機器やらに親しみが持てず疎んじる自分がどこかにいるのだろう。

素人には理解できない仕組みや専門的な数値から疾患と対処法を特定する高度化・専門化された医療が「魅せる医療」だとすると、若月医師が実践した農村地域医療は「見せる医療」だったと言えるのではないかと思う。

「地域の医療ニーズに応える」「患者を中心にした医療とケア」「地域医療と専門医療と（高齢者）福祉の切れ目ない関係」というのはいずれも重要であり、私も生活困窮者支援分野で「生活者・利用者目線」「福祉・就労一体型支援」等々の概念を使ってきている。それはサービス利用者と提供者、および提供者間の開いてしまった距離を埋めようとするあらゆる分野の者たちの合言葉になって久しい。

しかしどうも、この映画前半の古い映像が示す諸実践は、後半に語られるそれらの言葉とそれにまつわる苦悩の射程に収まらないような気がする。「啓発」だろうが、それも言葉として上品すぎ、大人しすぎる。それを名指そうとすると、やはり私にとっては「見せる医療」になる。誤解をおそれずに言えば「医療の見世物化」だ。

医者家を上げるのは死ぬとき、というのが常識になっている地域で訪問巡回医療をする、手術の様子を実況中継する、布団に寝たまの患者を集めて患者会を開く、「病院まつり」で疾患の展覧会を開く。映像とナレーションの真摯なトーンがその印象を持たせないが、見ようによっては「かなりむちゃくちゃ」だ。これは私の完全な推測だが、若月医師と現場には妙な開放感があり、笑いが絶えなかったのではないか。

そう思うのは、私が関わっていた路上の現場がそんな感じだったからだろう。路上の家々（ダンボールハウス）を訪問し、冬場は公園のアスファルトの上に布団を並べ、ブルーシートで囲って「野営」する。深刻で悲惨な現実間違いなくそこにあるのだが、同時に現場には妙に開放感があり、そして笑いが耐えなかった。その「ともに過ごす」一つ一つが、決して全員に対してではなかったが、「何が楽しくてやっているのかよくわからない学生あがり」と路上の人々の距離を縮めていった。

見せる、さらず、開く、飛び込むことは、それを遠巻きに眺めていた人々に、何よりも「理屈で割り切れない親しみ」を感じさせたのではないか。その「遠巻きに眺めていた人々」が、つまりは地域なのだろう。見せることが親しみと安心感を生み、その安心感が自分を見せる、さらず、開くことを可能にする。国際農村学会にまつわる映像は、私にとって、農村地域医療が世界に公認された、えらい、という話ではなく、見せることによって見せられることを可能にした地域医療実践と、見せられることによって見せることが可能になった農家の人々の安心感を示す一つの到達点として、印象に残るものだった。そのパフォーマンス性は、「機能分化と機能間連携」という堅い言葉からは、ともすればすり抜けていく。そこが危ない。本編終盤で語られた「想像力」とは、それを埋めるために必要な「何か」に他ならない。

これらすべては、ある種のノスタルジーを抜きには語れないものだが、ノスタルジーでは解決しない。私たちは「いま、本人に、地域に、社会に、見せる」ということがどういうことなのかを考え、試行錯誤を繰り返すしかない。「地域の民主化なくして医療の民主化はない」というメの言葉は、その課題の果てしなさを私たちに突きつける。どこに正解があるのか私にはわからないが、一つだけ確かなのは、開放感と笑いなくしてできる作業ではない、ということだろう。